



更科源蔵(さらしなげんぞう)
 ●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。
 ▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印



北海道新聞1971年1月12日夕刊
 「アイヌ文学を探る」⑧コノハズクの物語



『アイヌ文学の生活誌』

更科は、北海道内のコタンを訪ね歩き、膝を折って古老が語る生活や文化など聞き書きをしていくうちに「これまでいろいろな人によって数多くのアイヌ文学、ユカラその他が紹介されて来た。しかしその多くはアイヌ語を日本語に置き換える作業であって、なぜそうした文学が必要とされ、生まれそして伝承され今にいたったかについての解釈が、ほとんどされないままに過ぎされて来た」と感じます。自らの貧しい知識から、アイヌの人々の伝承文学は荒唐無稽のつくり話か迷信だろう、他の民族の文化より自分たちの文化が優位である、と批判する人々には理解されずにいました。

アイヌ文学の世界では、なぜ自然の小さな昆虫や野鳥が大事な神として伝承され、ある樹木はなぜ意地の悪い魔物として描かれているのか。ユカラなどのアイヌ歌謡の多くは意味のない音群の繰り返しなのに、なぜ鳥たちがうたう歌には人の話す言葉の意味があるのか。更科は、アイヌの古老たちと共に北海道の深く暗い自然の中を歩くうち、それは迷信でもつくり話でもなく、アイヌの人たちは自然の姿を読み取り、それを神の意志として文学に描き記憶することで、厳しい北海道の自然の中で生きていくための教典としたのだ、と感じるようになります。

『アイヌ文学の生活誌』は、北海道新聞夕刊に「アイヌ文学を探る」の題名で、第一部を1971(昭和46)年1月4日から3月9日まで51回、第二部を1972(昭和47)年6月1日から7月15日まで28回、第三部を同年12月12日から27日まで12回、計91回連載したものを下敷きに、加筆訂正して原稿を改め、出版されたものです。

※先月の原野紀行第91回の中で、最終段落「妻の妹の夫木版画家・川上澄生」とあるのは「妻の姉の夫」の誤りでした。おわびして訂正します。

0883292
 弟子屈町役場
 町民課町民相談係行

料金受取人私郵便
 劉路支店
 承認
 2068
 差出有効期間
 平成25年3月
 31日まで
 (切手不要)